

From Student

3オン1パットのプレイヤーのような
歯科医師を目指して…

緒方 武文 (大学4年)

4年生の緒方武文です。熊本県出身でゴルフ部に所属しています。最近、ようやくアベレージが90台になりました。ゴルフの面白いところは、2オン2パットでも、3オン1パットでも同じパー4というところにあると思います。私自身は飛距離がないので、後者になるのですが…。



私がこのような企画に選ばれたのは、先日行われた「第36回 田の歯科祭」の学園祭実行委員長をさせていただいたからです。おかげさまで、無事に学園祭を終えることができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

個性の強い実行委員のメンバーをまとめるのは大変で、全員に同じ方向を向かせるということは困難でした。果たして、自分は開業医としてやっていけるのか？ 従業員を引っ張っていけるのか？



「第36回 田の歯科祭」実行委員会のメンバーとともに。

という疑問にぶつかりました。しかし、私は3オン1パットのプレイヤーです。将来、1パットで沈められるよう、今は多くの人生経験を積み、魅力ある人間・魅力ある歯科医師になりたいと思います。

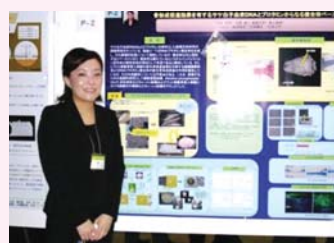
From Ph.D. candidate

第56回・日本歯科理工学会で
奨励賞をいただきました

森 南奈 (大学院1年)

「第56回・日本歯科理工学会」が開催されました。初めての学会で、さらに審査員の前での発表は想像以上に緊張しました。しかし、先生方や友人の応援のおかげで幸運にも賞をいただくことができました。

白子がなぜ生体材料に変身するのか？ タイトル「骨再生促進効果を有するサケ白子由来DNAとプロタミンからなる複合体ペースト (Complex paste of salmon testes-derived DNA and protamine can promote new bone formation)」を読まれた方から必ず聞かれる質問です。サケ白子にはプロタミンとDNAが含まれ、プロタミンはすでに医薬品として使われていますが、DNAは廃棄されています。そこでDNAを生体材料に応用する研究が始められています。



発表時に使用した説明ボードをバックに。

本研究はその一部でDNA / プロタミン複合体ペーストはインジェクション型なので歯周外科における骨欠損の新生骨形成を促す材料として臨床応用できるよう、今後さらなる研究を行いたいと思います。

FROM PARENTS 保護者様からのメッセージ

歯科(口腔科)医は命の入り口を守り
心の出口を守り育てる

平成22年11月13日、14日、12月4日、5日に、福岡県歯科医師会は口腔機能回復支援相談研修会を開催しました。これは超高齢化した日本において高まる「死ぬまで口から食べたい」という社会的ニーズに応えるため、他県より多少出遅れたもののスタートしました。まず医科のチーム医療に参加していくために医学的な用語の学習(麻痺の種類他)検査データの意味など、ケアマネジャーや介護士、スピーチトレーナー、主治医などとの連携がスムーズに取れるような基礎を学びました。さらに我々歯科医が担当する摂食嚥下障害の検査診断、リハビリなどのテクニックなども学んでいくことにより、福岡県内の家族と同じものを一緒に楽しく食べる機会を失っている方々のQOLを高めていく手助けをしていけるようになると思います。

近年、歯科医院の数はコンビニより多く、歯科医のワーキングブア問題などにより歯科医師を目指す者の数が減少してきています。しかし歯科医師が増えたから口の問題がすべてなくなったのでしょうか？ 日本では高校までは歯科検診が法的に義務づけられていますがそれ以降は歯科の問題は自己責任とされ、放置されています。そのため歯周病の罹患率は30歳以上で高率となっています。臼歯の喪失が摂食嚥下機能に与える影響は大きいと思われれますが、一般の方々の関心を引くまでには至っていません。脳卒中などによる麻痺が起こってからはその影響はさらに深刻になってきます。まだまだ我々歯科医師が必要とされる問題は多く残されています。在学中の君たちは歯科医師としての最低限の知識を習得し最短年限で歯科医師免許を取得してもらいたい。免許を得てからのほうが勉強することが多いのだから。



今井 富実生 様
(父兄後援会副会長)

脈々と続く大学の「気質」を
今でも感じながら…

私は、1974年に福岡歯科大学に入学し80年、2期生として卒業後、91年まで、口腔外科学第一講座に在籍し、足かけ18年福岡歯科大学にお世話になりました。また、娘は01年に福岡歯科大学に入学し、29期生として07年に卒業しました。さらに08年からは息子もお世話になっております。長期間一家で福岡歯科大学と関わっており、家族が揃うと大学の話題になることも珍しくありません。

思い起こせば、今から37年前、私が大学に入学した頃には、大学の周りは田圃ばかりで、実習などで夜が遅くなった帰り道には、カエルの大合唱に見送られながら家路に着いたものでした。しかし息子が通う現在は、都市高速道路、地下鉄、幹線が大学の近所を走り、その当時の面影はわずかばかりとなっております。

大学は、周囲の環境ばかりか、大学教育の雰囲気も大きく変わってきております。大学教育は、現在大学が大きく掲げているように「歯学」から「口腔医学」と変化し、歯科の知識のみならず、医科に関わる知識も有するような歯科医師を育てるように変化しております。

しかしながら、このように変化したもののばかりではなく、脈々と続く福岡歯科大学の「気質」というのを、現在でも至るところで感じることができます。例えば、実習や国家試験勉強などで先輩や卒業生が兄貴分、姉貴分となり、後輩を手取り足取り教育する雰囲気や、学園祭の際の福岡歯科大学の学生としての一体感などを挙げるすることができます。

この時代は流れても変化しない「気質」は、同窓生一人ひとりが長年にわたり培ってきた貴重なものではないかと思えます。私と息子では37歳の年齢差がございますが、この「気質」というものは、お互いが共有できる大いなる財産ではと考えます。今後とも、この「気質」を後輩の皆様にも伝える一助ができれば幸いと存じます。



後藤 文雄 様
(父兄後援会福岡支部長)